

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤0

冥衆—見えざる存在の支え

親鸞仏教センター所長 本多弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第124回がビジョンセンター東京八重洲南口で、第125回と第126回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第122回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター囑託研究員 越部 良一）

親鸞聖人は、真実信心には「冥衆護持の益」があるとおっしゃる。冥衆、それは見えない存在。我々は感覚器官で感じとれる内容を存在だと。特に現代はそういうふうになっておりますけれど、感じたり見えたりしない存在も存在としてあるのだと。言葉としては例えば神、神と言っても、いわゆるヨーロッパの神ではなくて、日本にあるような神々です。そういうものはこちらからは見えないけれども、向こうからは見ている存在として何か感じられる。亡くなっていった身近な人たちも又そうした存在です。その亡くなっていった見えざる存在がどこかで感じられる。そういう見えざる存在を冥衆という言葉で言おうとするわけです。

現代ではもう生きている時だけが勝負だという感覚で、冥衆はあまり力をもたなくなっていますけれど、そういう冥衆を感じずということも、命の本質にはあるように思うのです。ある意味でそれは怖いのです。そういうものが何か祟るのではないか、罰を下してくるのではないかとか、日本人の宗教観というのは、そういう冥衆の祟りを畏れて祀ってみたり、そういうことがあったわけです。

そういうものにおびえているのではなくて、むしろ冥衆に護ってもらって、こちらを見ている存



在に、どうぞ許して欲しいと言える存在として我々が立ち直ることが、親鸞が教えようとした冥衆護持の利益なのです。だから否定してしまうのではなくて、あってもそれが自分にとっては護ってくれる存在として感じられるのだというように転じてゆくことが大事な智慧なのではないかと思うのです。そういう冥衆を否定したら、多分、人間の生きる在り方が薄っぺらになってしまうと思うのです。

ある先生が言っておられたのですが、その先生は古い村に住んでおられて、村の会議に出てみたら、その会議に出ている長老方は古くからそこに居るから、家の前の道はじいさんが作った道であったり、裏山に生えている杉の木は曾じいさんが植えた杉であったりというようなことで、自分が居るだけではなくて、先祖伝来、護られて生きている、そういう感覚が非常に強い。そうすると会議をするときに、単に個人で今自分はこう考えるというのではなくて、「やあ、そういうことはやっぱりじいさんが許さないぞ」と、そういうものが発想されてくる。それが未来、次の世代に対しても今何をやっておくべきかという配慮にもなる。こういうことを言っておられて、面白いなと思ったことがあるのです。

現代の都市文明はそういう命の歴史の感覚がまったく抜けてしまって、そういうものをむしろ排除する面が強い社会になっていますけれども、現在だけが勝負なのではない。見えざる存在が現在を支えている。過去もあり、未来もあるという中に今があるのだから、我々も見えざる存在になった時に未来の人々に何が残せるかというような発想をすべきではないか。こういうことが人生を大事にさせるのではないかと思うのです。

生きた宗教としての 大乘仏教

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳

大拙の遺した文章はたくさんあるが、その共通点は「生きた文章」という表現に尽きる。大拙の生きた信仰がそのまま文章に反映されているのであろう。「文は人なり」という言葉は、まさに大拙、そして英訳『教行信証』にも該当する。今回もそのような文章を紹介したい。

■ 普遍的救済

英訳『教行信証』研究会を通じ、文章を精読してみると様々なことに気づく。その中で、大拙の特徴の一つ述べるのであれば、文字ではなく、文意を訳すことに重点があることが指摘できる。翻訳にはいくつかの方法がある。その中で私たちが想像しやすいのは原文と訳語を一致させる逐語訳であろう。しかし、大拙訳はそうではない。『教行信証』の字句を訳すのではなく、その意味するところを訳す箇所が見られるのである。過去にも述べたが、例えば「弘誓」に関する次の箇所がそうである。

AS I HUMBLY reflect, Amida's Prayer for universal deliverance is beyond my understanding. It is the great boat that crosses the ocean of impassability.

これは『教行信証』「総序」の「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」の翻訳である。言うまでもなく、この文章から『教行信証』は始まる。その点でこの一文をどのように訳すかは、英訳『教行信証』全体に影響を与えるだろう。その時に「弘誓」がAmida's Prayer for universal deliveranceとされているのは重要である。「弘誓」とは阿弥陀仏の本願が広く、普遍的であることを指す言葉であり、直接的な字義に「救済」の意は含まれない。だが、大拙は「阿弥陀の普遍的な本願」と訳すのではなく「普遍的救済のための阿弥陀の本願」とすることにより、「弘願」の内実を顕現させたのである。このような動的な翻訳が、英訳『教行信証』の特徴であり、ひいては『教行信証』自体にも新たな生命を与えるものである。



■ 「生きた」宗教

このように大拙の翻訳には一つの躍動性が込められている。注目すべきは、そのような躍動的翻訳は、大拙の変わらぬ仏教観、ことに大乘仏教観から生まれていることだろう。

それは「生きた宗教としての大乘仏教」という理解である。大乘仏教は仏陀の真の教えではないという非難に対して「このような不幸な仮説のせいで、生きた宗教としての大乘仏教の重要性は全く無視され続けてきた」（鈴木大拙著／佐々木閑訳『大乘仏教概論』〔岩波書店、2016〕、25頁）と述べるが、その原文、*Outlines of Mahāyāna Buddhism*（1907年刊行）には次の通りにある。

Owing to these unfortunate hypotheses, the significance of Mahāyānism as a living religion has been entirely ignored.

このようなliving religionとしての大乘仏教理解は大切だろう。大拙は上記文章につづいてMahāyānism a Living Faithという節も設けている。「生きた信仰としての大乘」という意味であるが、このような「生きた」という感覚が大拙に保持されていたことは重要である。

『大乘仏教概論』は、英訳『教行信証』の約60年前の出版である。しかし、その内容は本願などの理解をはじめ、後の著作、そして英訳『教行信証』にも大きな影響を与えている。今、述べたlivingについては英訳『教行信証』の「大行」=the great livingが想起されるであろう。英訳『教行信証』だけを読むとthe great livingには若干奇異な感じをおぼえ、それが過去に注目されてきた由縁でもある。しかし、大拙においてlivingとはその宗教に生命観があることを示すキーワードであった可能性がある。『大乘仏教概論』の読解は、英訳『教行信証』理解にも大きな影響を与えるのではないだろうか。英訳『教行信証』は、その著のみを読んでも、真意は読解できない。大拙の過去や、翻訳当時の文献を読むことにより重層的に理解できる。その点で、英訳『教行信証』と『大乘仏教概論』の比較は、今後の研究すべきテーマだろう。